

ざらっと残っていること

佃 七緒

つちのいえと井上先生について、今の私にすり込まれていることを雑多に書きます。

「土は再生可能で、土で作る家はプロでなくても誰でも、やり方さえ分かれば直せる」
井上先生のこの一言には、「何度でも素材に戻して組み立て直すことができる」「よく見たら理解できる構造をしている」「誰でもやればできる特殊でない技術と道具」という要素が含まれています。どんな人にとっても「見て・考えて・作る」機会を開くこと、私が視覚芸術に携わることを楽しむならこれだわ、とまるっとそのまま現在の私の制作のやり方を決める要素として、取り込んでいると思います。

「ニッチ」

つちのいえであちこちにできていったニッチには、私がいま美術を見るときに楽しんでいることが詰め込まれています。「そこに何故だか壁の厚みの分の凹みがある」という状態は、これから何かを組み合わせて置く(活動する)ことを人に誘発し、そこに視線が行くよう誘導し、それでいて「壁である」という住む人を含めたその環境全体との関わりを示していて、ああ、そういうのしたかったんだよな、という私の制作意欲の一つになっています。

もう長い間、どこの国に行っても追いかけており、日本の木造軸組の家では作りにくい構造だからこそ、憧れのように駆り立てられて外にでかける口実にもなっている気がします。

2011年度テーマ演習参加

2015年大学院陶磁器専攻修了

近年の活動に、2018年「Artspace」(シドニー)で滞在制作(京都芸術センター・エクスチェンジプログラム)、2019年飛鳥アートヴィレッジ参加、2020年 個展「石積みの家との18+9通信」ギャラリー佑英(大阪)、2021年1-3月 ALLNIGHT HAPS 2020「翻訳するディスタンス」HAPS、京都(企画者として参加)など

<https://nanaotsukuda.com/>



ペルーのアマゾン雨林の村サン・ロケ・デ・クンバサでの土壁づくり。草を混ぜ込んだ土を振り回して一定量の塊を作り、それを壁の基材の両側から挟み込んで押さえる。2016年、佃七緒撮影。